

## Theatre in Education について —「観る」活動と「演じる」活動の関連—

小林 由利子

### A Study of Theatre in Education: Seeking the Connection between “Seeing” and “Doing”

Yuriko Kobayashi

Kindergarten teachers often tell children a story illustrated with picture cards, or perform storytelling, a puppet show/play, or a short play before children returning home. Also the teachers lead drama with children. It is said in Early Childhood Education that “playing” is very important for children. I would like to clarify the connection among “playing,” “seeing” and “doing,” especially between “seeing” and “doing” in this paper. I choose Theatre in Education (TIE) to seek this connection. TIE is a British educational innovation and started in the mid-1960's. TIE tried to find out educational objectives through theatre. The TIE program takes theatre to classroom and works with children. Children see a performance and participate in it. The TIE program is created by “actor-teachers,” and performed/led by them. “Actor-teachers” are crucial in TIE. I think that the training program of “actor-teachers” is useful for students in Early Childhood Education to find out the connection among play, drama, and theatre.

#### I. はじめに

幼稚園において、降園前の集まりの時間に習慣的に子どもたちに紙芝居や人形劇などを「観せる」活動が行われている。また、保育者が口演童話や劇を演じる必要性について叫ばれている。そして、平成元年に改定された新しい幼稚園教育要領においては、「幼児の自発的な活動としての遊び」が重視され、「遊びを通しての指導」が幼稚園教育において求められている。

そこで、著者は幼稚園教育において子どもの「遊び」を基軸として、子どもが劇を「観る」という活動と「演じる」という活動との関連について考えていくことにする。本論では、この

ことを明らかにするために、1960年代から学校カリキュラムの中に積極的に児童演劇とドラマを取り入れてきた英国の教育改革を取り上げて検討していくことにする。特に、児童演劇を「観る」活動とドラマを「演じる」活動とのつながりを示している Theater in Education (TIE)に焦点をあてて考察していくことにする。

## Ⅱ. 英国における児童演劇の定義

1993年に ASSITEJ/GB (the international Association of Theatre for Children and Young People/Great Britain) は、児童演劇について3つに分類した。具体的には、Children's Theatre (CT), Young People's Theatre (YPT), Theatre in Education (TIE)という名称である。それぞれについては、次のように定義づけられている。

### (1) Children's Theatre (CT)

CTは、「12歳以下の子どものために、プロの劇団によって上演される」<sup>[1]</sup>演劇を指す。CTの目的は、2つある。一つは、CTが、「芸術形態である」<sup>[2]</sup>ということである。言い換えれば、CTはひとつの芸術として存在するということである。二つ目は、「ファンタジーや想像性を刺激したり、演劇鑑賞力を高めるため方法としてエンターテインメントを使う」<sup>[3]</sup>ということである。従ってCTは、「しばしば教育的でもあり、観客の参加を含む」<sup>[4]</sup>こともある。代表的な劇団は、Unicorn Theatre, Pop-Up Theatre, Quicksilver, Polka Theatre for Children である。

### (2) Young People's Theatre (YPT)

YPTは、「教育的演劇」と呼ばれる場合もある。YPTは、「教育にかかわる中でプロの俳優による劇の上演を意味する」<sup>[5]</sup>ために使われる。また、YPTは、児童が観客となる場所をさす。たとえば、「子どもクラブやコミュニティー・センターのような場所を意味する」<sup>[6]</sup>。YPTは、しばしば社会問題をとりあげる。「劇団は、劇についての手引きや演劇鑑賞の事前事後活動についての教材を、教師に提供する」<sup>[7]</sup>。代表的な劇団は、Theatre Centre, Half Moon YPT である。

### (3) Theatre in Education (TIE)

TIEは、「学校の中でプロの“actor-teachers”によって行われる」<sup>[8]</sup>ことを指す。主な目的は、「すべてのカリキュラムにわたって広範囲に学習の機会を創り出すために演劇とドラマを使う

こと<sup>9)</sup>である。TIE の典型的なやり方は、「1 クラスと少なくとも半日一緒に活動して、さらに劇の上演<sup>10)</sup>を行うことである。TIE は、生徒が活動や劇の一部に積極的に参加する形態になっている。代表的な劇団は、Belgrade Theatre in Education Company, Breakout TIE, GYPT, Lees TIE Co., Duckes Theatre TIE Company である。

英国では、これら 3 つを総称して Theatre for Young People (TYP) と呼んでいる。本論では「観る」活動と「演じる」活動の関係性を明らかにしていくために、TIE を取り上げて検討していくことにする。

### Ⅲ. TIE とは何か

TIE は、英国で、1960年代の中頃に始まった演劇を媒介とした教育革新であり教育運動である。Rosenberg は TIE は、「英国で始まった運動で、教育的目的と演劇的目的とを結び合わせようとした<sup>11)</sup>」ものであると定義づけた。方は、TIE は「1960年代の中頃、イギリスで始まった学校巡回劇団による演劇教室の一つのあり方<sup>12)</sup>」であると定義づけている。さらに続けて、TIE の目的は、「芸術鑑賞のための劇公演ではなく、俳優が教師との綿密な打ち合わせをもとに、劇を用いた活動をプログラムし、その演技力を生かして子どもの学習を手助けする<sup>13)</sup>」ことであると述べている。

TIE の目的は、「公教育の中で、演劇のテクニックと演劇に潜在的に含まれる想像性とを役立たせる<sup>14)</sup>」ということである。TIE 運動の先駆者である Vallins は、中等教育のための初期の TIE の活動について次のように述べている。主に TIE は、「音響効果や歌や写真や大きな地図やいろいろな小道具などの演劇的要素を用いたドキュメンタリー演劇であり、意図的な教育活動である<sup>15)</sup>」と定義づけている。

Vine は、TIE の劇団それぞれが、さまざまな実践を行っているので、TIE そのものを定義することは難しい<sup>16)</sup>とあらかじめ断った上でつぎのように述べている。

TIE は、演劇形態のための包括的用語である。その演劇形態は、“教えること (teaching)” と演劇 (theatre) について、熟練された技術と方法論を両方兼ね備えている専門家によって提供されるものである。TIE は、主に学校の中で上演される。しかし、児童館 (youth clubs) や大学や劇場や他の公共施設でも上演される。上演する人たちは、伝統的に “actor-teachers” と呼ばれている。観客は、一般的に 5 歳から 19 歳までの中から特定の年齢層が選り出される。大部分の劇団は、ある特定の地域の観客と密接にかかわりながら仕事をしている<sup>17)</sup>。

以上のことから、TIE は、1960年代の中頃に、英国で始まった、演劇を媒介とした教育的活動であり、公教育の学校カリキュラムの一部として位置づけられたプログラムであると言える。TIE は、地域に密着した活動を行うことを主眼としている。その大きな理由は、地方自治体から主な助成金を受けているからである。また、英国において、地域ごとに抱えている社会問題に違いがあるためである。さらに、前にも述べたように、TIE は公教育の一環として位置づけられているからである。従って、基本的に TIE 劇団は、個々の公立学校からは上演料を受け取らない。そのかわり学校側は、半日から1日半というまとまった時間を TIE プログラムに割り当てる。

TIE の方法論について、Murphy は次のように述べている。

地方に本拠地をおく劇団の俳優が、教科書を検討しながら劇化する目的、あるいは最近の劇公演の宣伝をするために、学校を訪問することを意味しない。TIE は、商業児童演劇ではなく、ドラマを教えることでもない。しかしながら、それらの中にあるいくつかの(演劇/ドラマの)テクニクが、含まれる場合もある。登場人物としての俳優たちとグループとしての子どもたちが、ある状況を通して探求したり、演じてみたりすることである。そして、彼らは、その状況に身体的にも感情的にも深く関与するのである<sup>(18)</sup>。

TIE は、演劇を媒介として、子どもたちが、“actor-teachers”が創り出す状況を観たり、両者が登場人物になりながら創り出す状況を実際に体験することを通して、問題解決や意志決定の機会をもつプログラムである。さらに言えば、TIE は、一般的に伝統的演劇と教育的ドラマに含まれる要素を組み合わせたプログラムである。具体的には、次のような要素がある。

- ① 伝統的演劇の要素とは、登場人物としての俳優が現れること、脚本化された会話や衣装や舞台装置や音響効果を使用することなどである。
- ② 教育的ドラマの要素とは、即興された劇活動に子どもたちが活発に参加すること、そしてその中でアイデアが、子どもたちにあった形で探求されることを意味している<sup>(19)</sup>。

次に、TIE の脚本について考えてみる。特徴的なことは、脚本の中に“actor-teachers”が即興する部分が多く含まれていることである。Murphy は、次のように述べている。

TIE は、俳優間かわされる対話を脚本化することもある。しかし、大部分の「台本」は、俳優

## Theatre in Education について

と彼らにかかわっている子どもたちによって、即興的に演じられる。したがって、TIE は、俳優たちと子どもたちが創り出した状況に対する彼らの反応に直接的に起因する。(TIE)のプログラムは、題材や子どもたちの年齢によって、あらかじめ決められた終わりがある場合もあれば、オープン・エンディングになっている場合もある<sup>(20)</sup>。

TIE では、“actor-teachers”と子どもたちが創り出した状況に応じて即興的に演じる。そのため、“actor-teachers”は、登場人物を演じながら、子どもたちの内面の動きを注意深く読み取らなければならない。彼らは、次に示す二つのことに焦点をあてながら、TIE のプログラムを遂行している。

- ①子どもたちが、活動に深くかかわっているかどうかということ。
- ②俳優たちが彼らの才能を駆使しながら、子どもたちが、自分自身を表現することを勇気づけることと、個人としてまたグループとして、彼らがかかわっている問題について子どもと一緒に解決すること<sup>(21)</sup>。

このようにTIEの“actor-teachers”は、俳優としての役割だけでなく、教師としての役割も担っている。そのため、単に彼らを“actors(俳優)”と呼ばずに“actor-teachers”という呼ぶのである。

TIE プログラムは、プロの劇団による一回限りの娯楽や演劇鑑賞を目的としたプロの劇団による学校巡回公演ではない。TIE は、プログラムとして総合的に構造化されたものである。TIE は、教育目的をもって、高度に構造化された「ロール・プレイ」である。そして、TIE は「現実世界」と映し出した「想像世界」の中で子どもたちが、様々な問題解決と意志決定の経験をすることである。

TIE プログラムは、劇団によって考案される。さらに、学校カリキュラムと子どもたち自身の生活の両方に対して妥当性のある題材に関連したことについて、劇団が調査研究する。そして、題材から吐き出される状況や問題に子どもたちが直接的に関与できるように構造化する。TIE プログラムは、TIE 劇団によって学校の中で上演される<sup>(22)</sup>。

小 林 由利子

TIE 劇団は、取り上げる題材について入念な調査と分析を行う。これらのリサーチから得られた素材や題材を使って、数カ月かけてプログラムを練り上げていく。このように TIE プログラムは、リサーチやリハーサルに膨大な時間と労力をかけて制作される。そして、公演期間中であっても常に修正が加えられる。

#### Ⅳ. TIE の特徴

TIE の特徴について、キーワードを上げながら考えていく。

##### (1) “actor-teachers”

“actor-teachers” という存在が、TIE にとって不可欠である。彼らは、優れた俳優であるだけでなく、教師としても優れていなければならない。TIE の初期の頃は、ほとんどの“actor-teachers” は、実際に教育現場で教えた経験を持っていた。

##### (2) 教育目的

「TIE の第一の特徴は、明確な教育的目的をもっているということである。TIE 劇団は、娯楽を提供することをねらいとしていない。TIE 劇団は、演劇鑑賞力や演技力を教えることをねらいとせず、それ以外の“何か”を教えることをねらいとしている。」<sup>23</sup>TIE は、演劇そのものを教えるのではなく、媒介として演劇を用いているのである。

##### (3) 学習内容： 主に社会問題

TIE の教材や題材や素材は、非常に多種多様である。「典型的なものは、言語発達や人種差別問題や概念形成や現代の社会問題など(例えば、原子力問題)である。学習内容に焦点をあてながら選択された劇の内容は、歴史的あるいは現代的な出来事という現実世界に起きたことから引き出される。例えば、『18世紀の奴隷の経験の記録』、『Karen Silkwood』の記録などから導きだされる。」<sup>24</sup>

他のテーマの例としては、次のようなものもある。『イギリスの17世紀半ばのピューリタン革命』『アラブ人居留地区のアラブ・イスラエル問題』『ナチ政権の台頭してきた1938年のドイツの社会生活』『夢を抱いた若者たちの挫折と反目—人種問題を含む1950年代のイギリス—』『1920年代の繊維工場のストライキ』<sup>25</sup>『ユーゴスラビアの分裂について』『英国からのカナダ移民問題』『17世紀における小作農問題と戦争』がある。

このような社会的問題や歴史的題材を取り上げ、それらを通して、現在子どもが置かれてい

る生活や社会について目を向けさせる。そして、TIE は、それらのことについて考える機会を演劇を通して提供し、問題解決と意志決定の場を子どもたちに与えている。要するに、TIE を通して、子どもたちが“actor-teachers”に導かれながら、テーマについて教育的体験をすることである。

#### (4) クラス担任教師との協力関係

「TIE 劇団は、自分たちの考えていることと同様に教師の要望に答えながら、教師と密接に協力しながら仕事を進める。多くの劇団が、新しい部分ができるたびに教師と話し合い機会をもつ。さらに、教師に教室で行うための事前事後の活動の資料を提供する。」<sup>[26]</sup>一般的に、TIE 劇団は、“Teacher’s Pack”と呼ばれる教材をクラス担任教師に手渡す。教師はそれを参考にしながら、事前事後活動を行う。時には、“actor-teachers”が、それらの活動を行う場合もある。また、TIE 劇団は、“Teacher’s Pack”を教師が理解し、使いこなすためのワークショップを開いたりもする。

#### (5) クラス単位での活動

「TIE 劇団は、通常30から40人の観客と深くかかわりながら活動をする。TIE の活動は、普通半日以上続けられる。」<sup>[27]</sup>TIE プログラムは、教室に“actor-teachers”が、訪ねてきたところから始まる場合が多い。その後、クラス全員が、劇のセットがすでに準備されている体育館に移動してプログラムを続ける。

#### (6) 参加劇形式

「TIE の際立った形式上の特徴は、能動的な観客参加を使うことである。」<sup>[28]</sup>TIE プログラムにおいて、人数が重要な理由は、子どもたちが劇に登場人物になって参加するためである。劇を観たり、劇で起きた事件について相談したり、劇で必要な意志決定を下したり、“actor-teachers”が演じている登場人物の台詞を代弁したりしなければならない。他には、登場人物を知るために質問をしなければならない。また、登場人物が困難な場面に直面していたら、助言を与えたりしなければならない。

このように、子どもたちは、自ら劇の登場人物になりながら、様々な状況について、積極的に問題解決や意志決定を繰り返さなければならない。

## V. TIE の歴史

TIE は、イギリスで1960年代に第二次世界大戦後の貧困の増大と急激な社会変化に対応していくために始まった児童福祉の一つともいえる。一方、1944年の画期的な教育法が、教育界に実験的試みと発展をもたらした。つまり、「児童中心主義の教授法と発見学習は、従来の知識の伝達のための教師中心のやり方に挑戦をいどみ続けた。同時に、広範囲にわたる学校教育に対する提案は、教室を基本とした教育のあり方自体に变革を余儀なくさせた。」<sup>(29)</sup>

演劇教育では、この新しい教育法に基づいて、具体的に次の3つの動きがあった。

- ①1948年に The late Caryl Jenner によって Unicorn Theatre が創立された。
- ②1954年に Brian Way と Margaret Faulkes によって Theatre Center が創立された。
- ③1954年に Peter Slade によって *Child Drama* が出版された<sup>(30)</sup>。

これらの動きの影響を受けながら、1965年9月にコベントリー市立 Belgrade Theatre のプログラムの一つとして TIE が、初めて創設された。コベントリー市で TIE が始まった理由は、いくつか考えられる。この市は、第2次世界大戦中に激しく爆撃を受け、市の大半を焼失した。そのため市民も市もなんとか戦後の復興をしようとする気運がすでにあった。戦争により、文化的遺産はほとんど破滅されたので、コベントリー市全体で経済的復興だけでなく、文化的にも復興していきたいと願っていた。そのような状況を受けて市が、1956年に市民劇場として Belgrade Theatre を建てた。

従って、この劇場は、「コベントリー市の学校の生徒たちに、ドラマの経験を与えるという責任を負っていた。」<sup>(31)</sup>具体的に言えば、「演劇鑑賞の機会を提供するだけでなく、学校の休日や週末に演劇がどのようにつくられるかを見せたり、即興や制作のワークショップを行っていた。」<sup>(32)</sup>

このような経過を経て実際に、1965年9月1日に TIE が始まった。この TIE の中心人物は、演出家と元教師の2人であった。彼らは、コベントリー市教育委員会の援助を受けることができた。

Belgrade Theatre TIE Company が創設されてから、英国各地に TIE 劇団が生まれた。多くの TIE 劇団は、地方に本拠地をおき、定期的に公演を行っている劇団によって創られた。また、他の TIE 劇団は、地方の教育委員会によって設立された。基本的には、TIE 劇団は、



地方自治体や英国文化庁からの助成金で運営されていた<sup>33)</sup>。

TIE は、「創造的エネルギーとその実践者たちの献身的かわりによって、燃えたぎるように」<sup>34)</sup>瞬く間に普及していった。それは、また、「60年代の理想主義を吹き込まれた若者の運動であり、同時に従来 of 教育組織と伝統演劇に対する批判の運動」<sup>35)</sup>でもあった。従って、TIE は、60-70年代にかけて熱狂的な歓迎を受けながら広まっていった。しかしながら、問題点として、TIE は「事業 (the enterprise) という革新的本質を持つがゆえに、必然的に政治的傾向」<sup>35)</sup>を徐々に強めていくことになった。

さらに、1975年に Standing Conference of Young People's Theatre (SCYPT) が、TIE 劇団によって組織されたことによりこの傾向に拍車がかかった。SCYPT は、それぞれ異なる活動をしている TIE 劇団が、「1年に1回集まり、それぞれが行っている仕事について意見を交換したり、論争したりする」<sup>36)</sup>公開討論の場を持つことを目的とした。それにより、TIE 劇団の仕事の質の向上をめざした。SCYPT の他の仕事内容としては、「季刊雑誌の発行、近接地域の TIE 劇団の定例会の開催、専門委員会の組織」<sup>37)</sup>がある。1980年代における、TIE の活動は、SCYPT を中心にして行われていったと言える。一方で、SCYPT の活動は、TIE 劇団に対して仕事内容について苛酷な条件をつきつけていった。公開討論の場で上演されたプログラムについて徹底的に論議され、いくつかの TIE 劇団は、TIE 劇団としての水準に達していないという理由から、SCYPT から除名された。また、TIE 劇団であることを自らやめ、脱会していった劇団もあった。あるいは、徐々に SCYPT から距離をおいていった劇団もあった。

他方、SCYPT は、「重要な政治的、実戦的、理論的問題に焦点をあてるための運動を可能にした。例えば、資金集め、検閲、職業擁護、Drama in Education (DIE) の発展、教育理論、多民族文化責任、性的差別、障害者問題を上げることができる。」<sup>38)</sup>

しかし、1980年代の末に、TIE 劇団による「様々な試みは、将来を打ち砕かれたように見られる。」<sup>39)</sup>それは、TIE プログラムに対する助成金の減額という形で表面化した。英国政府は、TIE 劇団に対して自己資金でもっと運営するように要求してきた。これは、TIE 劇団に限らず、芸術全般について行われた。その一方で、英国政府は、今まで地方自治体によって行われた教育行政を中央集権化しようとして、財政的圧力をかけ続けている。政府は、助成金を地方自治体ではなく、直接各学校にだし、それぞれの学校で助成金の使途を決定させるように仕向けている。従って、TIE プログラムはまとまった助成金を得られないようになってきている。

さらに、1988年から出されたナショナル・カリキュラムに演劇が教科として含まれていなかったことも TIE の衰退に拍車をかけている。

先にも述べたように、TIE 自体に内包する特質と SCYPT の政治的運動が、助成金の打ち

切りの標的になる遠因になったと考えられる。従って、TIE 劇団のいくつかは、解散に追い込まれた。また、いくつかの劇団は、小人数の観客から大人数の観客を相手にするように経営方針を変えざるをえなくなった。さらに、いくつかの劇団は、TIE 劇団であることをやめ、YPT 劇団に形を変えて生き残りをかけている。

同時に、1960年代に活躍した多くの“actor-teachers”が、TIE 劇団を退団したことも1980年代末から1990年代始めにかけて TIE が、急速に衰退していく一因になったと考えられる。しかしながら、現在彼らの多くが、大学で TIE について研究し、学生に教えていることを考えれば、TIE の理論と方法論と業績は、英国において消滅しないと希望的観測もできる。

1990年代における新しい傾向として、英国よりむしろオーストラリアやアメリカ合衆国において、TIE の理論や方法論についての関心の高まりが見られる。英国における1960年代のように、アメリカにおいて若い人たちが TIE 劇団を創設し活動している。

## VI. おわりに

TIE を取り上げて検討することを通して、演劇を「観る」ことと劇を「演じる」ことを融合したプログラムを構成することが可能であることが、明らかになった。TIE プログラムを行うためには、“actor-teachers”を養成することが不可欠である。今後は、大学における“actor-teachers”を養成するためのプログラムの可能性について検討をしていきたい。また、具体的な TIE プログラムについての検討もしていきたい。

## 引用文献

- (1) SSITEJ/GB *Theatre for Children and Young People* (London: The British Center of ASSITEJ, 1993) 7.
- (2) 前掲書, 7.
- (3) 前掲書, 7.
- (4) 前掲書, 7.
- (5) 前掲書, 7.
- (6) 前掲書, 7.
- (7) 前掲書, 7.
- (8) 前掲書, 7.
- (9) 前掲書, 7.
- (10) 前掲書, 7.
- (11) Rosenberg, Helene S., and Christine Prendergast. *Theatre for Young People: A Sense of Occasion*. (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1983) 14.

## Theatre in Education について

- (12) 方勝, 「シアター・イン・エデュケーション」, 『玉川学校劇辞典』, 岡田陽・落合聰三郎編, 玉川大学出版部, 1984, 429.
- (13) 同上, 429.
- (14) Jackson, Tony, ed. *Learning Through Theatre: Essay and Casebooks on Theatre in Education*. (Manchester: Manchester University Press, 1980) viii.
- (15) Vallins, Gordon. “The Beginnings of TIE.” *Learning Through Theatre: Essay and Casebook Theatre in Education*. ed. Tony Jackson. (Manchester: Manchester University Press, 1980) 13.
- (16) Vine, Chris. “Theatre in Education.” *Participatory Theatre: A Model in Theamaking*. N.p.: n.p., 1993. N.pag.
- (17) 前掲書, N. pag.
- (18) Murphy, Eileen. “Introduction.” *Sweet Pie*. (London: Eyre Methuen, Ltd., 1975) 5.
- (19) Coult, Tony. “Buried Glories.” *Plays and Players*. Sep., (1977) : 18–19
- (20) Murphy, 5.
- (21) 前掲書, 5.
- (22) Coult. 18–19.
- (23) Vine, N. pag.
- (24) 前掲書, N. pag.
- (25) 清水豊子 「子どもたちへの豪華な送り物」, 『演劇と教育』, No. 397, 晩成書房, 1988 : 57.
- (26) Vine, N. pag.
- (27) 前掲書, N. pag.
- (28) 前掲書, N. pag.
- (29) 前掲書, N. pag.
- (30) Suffolk, Lynne. “Theatre for Young People.” N.p.: n.p., 1993. 4.
- (31) 清水豊子 「英国の T.I.E. 劇団の革新性と理想追求」 N.p.: n.p., n.d. 111.
- (32) 前掲書, 112.
- (33) Vine, N. pag. 参照.
- (34) 前掲書, N. pag.
- (35) 前掲書, N. pag.
- (36) 前掲書, N. pag.
- (37) 前掲書, N. pag.
- (38) 前掲書, N. pag.
- (39) Vine, Chris. “TIE Today.” N.p: n.p., 1993. N. pag.

## 参考文献

- Clark, Lynn. Robert Colby, Jonathan Neelands, and Chris Vine. “New Trends in DIE/TIE Practice: Great Britain and the United States.” American Alliance for Theatre & Education Conference. Boston. 7 Aug. 1993.
- Colby, Maisie. 時岡茂秀訳 「劇をするもの皆おいで！」 No. 28 少年演劇センター(1981) : 14-29.
- Colby, Robert. and James Robinson. *Theatre Education Graduate Institute Emerson College Division of*

- Continuuing Education*. Boston: Emerson College, 1993.
- The Confession of Ann Putnam*. Espresso Theatre in Education. American Alliance for Theatre & Education Conference, Boston. 7 Aug. 1993.
- Davis, Jed H. and Jane Evans. *Theatre, Children and Youth*. revised ed., New Orleans: Anchorage Press, Inc., 1987.
- Greig, Noël. *The Land of Whisper: Teachers' Pack*. London: Theatre Center, 1992.
- Indigo*. by Ian Yeoman. Dukes Theatre in Education. Lancaster, Mar. 1993.
- Jackson, Tony, ed., *Learning Through Theatre*. Mancheste: Manchester University Press, 1980.
- 香川良成「イギリスにおけるドラマ教育」『喜劇悲劇』No. 506 早川書店(1983) : 60-62.
- 片岡徳雄編著『劇表現を教育に生かす』玉川大学出版部 1982.
- Koste, Virginia Glasgow. *Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life*. New Orleans: Anchorage Press. 1978.
- The Land of Whispers*. by Theatre Center. Dir. Libby Mason. Writer. Noël Greig. Wanstead High School, Wanstead. 23 Mar. 1993.
- Neelands, Jpnathan. *Learning Through Imagined Experience: The Role of Drama in the National Curriculum*. London: Hodder & Stoughton, 1992.
- 落合聰三郎「イギリスの演劇教育」『少年演劇』No. 28 少年演劇センター(1981) : 2-10.
- 落合聰三郎「キッドグルック学校のドラマ教授細目」『少年演劇』No. 28 少年演劇センター(1981) : 11-13.
- O'Toole, John. *Theatr in Education*. Sevenoaks, Hodder and Stoughton Educational, 1978.
- Salt of Earth*. By Disnr Samuels. Dir. Diane Samuels. Theatre Center. Theatre Center Theatre, London. 13 Mar. 1993.
- 佐藤恭子「いま大人が参加劇を求める時代?—イギリスでの参加劇—」『少年演劇』No. 44 日本演劇協会(1992) : 17-21.
- Samuels, Diane. *Salt of Earth: Teachers' Pack*. London: Theatre Center. 1993.
- 佐野正之『教室にドラマを! : 教師のためのクリエイティブドラマ入門』晩成書房1981.
- Shewring, Sue. *Indigo: Teachers' Pack*. Lancaster: Dukes Theatre in Education Company, 1992.
- Shmizu, Toyoko. "Drama in Britain: A Perspective from Japan." *London Drama* London: N.p., N.d. : 18-20.
- The Standing Conference of Young Peoples Theatre. *SCYPT Journal*. No. 25. Lancaster: The Standing Conference of Young Peoples. Jan., 1993.
- The Standing Conference of Young Peoples Theatre. *SCYPT Journal*. No. 26. Lancaster: The Standing Conference of Young Peoples. Janly., 1993.
- 清水豊子「イギリスの教育改革とドラマ教育のゆくへ」『演劇と教育』No. 392. 日本演劇教育連盟編, 晩成書房(1989) : 70-75.
- 清水豊子「ドラマ教育の多様な側面」『演劇と教育』No. 393 日本演劇教育連盟 晩成書房(1989) : 73-77.
- 清水豊子「現代社会とピーター・スレイド卿のバイオニア精神」No. 394 日本演劇教育連盟 晩成書房(1989) : 54-57.
- 清水豊子「イギリスにおける演劇教育の歴史と現状」『日本演劇学会紀要』No. 29 日本演劇学会(1991) : 37-45.

Theatre in Education について

- 清水豊子「教科としての『ドラマ』と演劇研究」『演劇と教育』No. 395 日本演劇教育連盟 晩成書房 (1989) : 52-55.
- 清水豊子「初等・中等教育でのドラマの役割」『演劇と教育』No. 396 日本演劇教育連盟 晩成書房 (1989) : 190-193.
- Slade, Peter. *Introduction to Child Drama*. London: University of London Press, 1958.
- Suffolk, Lynne. and Chris Vine. Theatre in Education. Pre. American Alliance for Theatre & Education Conference. Boston, 1-4 Aug. 1993.
- Wagner, Betty Jane. *Dorothy Heathcote: Drama as a Learning Medium*. Washington, D.C.: National Education Association, 1976.
- Way, Brian. *Children's Theatre and Audience Participation*. Manchester, NH: Theatre Center America, 1977.
- Warren, Kathleen. *Hooked on Drama: The Theory and Practice of Drama*. Waverley, Australia: Macquarie University Institute of Early Childhood, 1992.
- Way of Change*. by Geoff Gillham. The Belgrade Theatre-in-Education. Wood-way Park School and Community College, Coventry. 9-10. Mar. 1993.